

道綽『安樂集』所説の「善知識」について

杉山 裕 俊

『安樂集』第十一大門には「善知識に託す」という一節があり、道綽は偽経とされる『法句経』を引用して善知識の性格を明かすとともに、末法の時代に生きるすべての衆生に対して、善知識の教えに依り、阿彌陀仏の浄土に往生したいと願う心（＝願生心）を発すべきであると勧示している。本論ではこのような『安樂集』における善知識の用例を、第二大門ならびに第十一大門の内容を中心に整理していき、道綽が提示する独自の善知識理解とその意義について再検討を試みたい。

『安樂集』における善知識の用例として、まず注目すべきは第二大門にみられる別時意会通説である。道綽は『観無量寿経』（以下『観経』と略す）下品下生に説かれる「十念往生」は単なる因をなすのみであり、即得往生の因とはなり得ないと批難する撰論系統の人師に対して、『観経』の経意は宿因による十念往生を顕すものであるから、十念は決定順次往生であると通釈している。このような宿因論に立脚し、道綽は現世で十念を成就する者は皆過去世における宿因を有しており、宿因があるからこそ現生において必ず善知識に遇うことができ、さらにはその教えによつて浄土に往生することができると説くのである。したがって、道綽が考える下品下生の往生には「宿因」↓「遇善知識」↓「十念成就」が必要不可欠となり、諸師の『観経』理解にはみられないこの宿因論を通じて、『安樂集』における善知識の必要性というものを再提示することができる。

次に、道綽は第十一大門の中で『法句経』を引用し、一切衆生が依るべき善知識の具体相を、「空・無相・無願の三三昧を獲得し、畢竟空の

中においてあらゆる仏法を説くことのできる存在」として定義している。このような規定を行ったうえで、道綽は善知識に対して西方に帰することを勧めており、その根拠として娑婆世界（＝此土）は退処、浄土（＝彼土）は不退処であることをあげているが、これは第五大門に示される難易二道の議論を踏まえたものであると考えられる。おそらく、道綽は自らの教判論にもとづいて善知識の議論を展開しており、そうであるからこそ、空観の教えを説く者として位置づけられていた『法句経』の善知識を、往生浄土を勧める善知識へと転換しているであろう。以上のことから、『安樂集』における善知識とは、末法に生きるすべての衆生に対して易行道（＝念仏三昧の実践による往生浄土）を説き勧め、阿彌陀仏の西方極樂浄土に往生したいと願う心を発させる浄土教の先達として理解することができる。

また道綽は『法句経』の引用に際し、原文にはない「衆生の与に善知識と作るべし」（浄全一・七〇八上）という一文を付加している。これを道綽の意図的な付加であるとすれば、この一文における主語、すなわち「誰」が衆生のために善知識となるのか、という問題を改めて検討する必要がある。このような問題意識のもと、再度、第十一大門の冒頭をみると、「一切衆生に勧む。善知識に託して西に向かう意を作すべし」（浄全一・七〇八上）とあり、道綽は一切衆生に対して「善知識の教えに依り、願生心を発すべきである」と勧めている。この直前にみられる「一切衆生に勧む」を根拠とすれば、先の道綽が付加した一文の主語もやはり「一切衆生」であると考えられ、ここは「一切衆生、衆生の与に善知識と作るべし」と読み取ることができる。つまり、道綽は善知識に依るべきことを勧めると同時に、往生した後は自らもまた他の衆生のために善知識となるべきであると説いているのではないだろうか。

そして、善知識の教えによつて浄土に往生した者が、いかにして他の衆生の善知識となり得るのか、という点について、得生以後は菩薩道を

退転することなく勝進し、あらゆる仏道修行を具備することができる
明かしている。こうした説示によれば、浄土に往生した得生人こそがま
さに善知識となり得る存在であり、往生した後に娑婆世界へと還り、他
の衆生に往生を勧める浄土教の先達となるのであろう。このように、一
切衆生の得生以後の人格を善知識として敷衍することによって、『安樂
集』における善知識の中に還相的性格を見出すことができ、同時に、道
綽にとつて善知識とは、①往生浄土の教えを説いた釈尊であり、②釈尊
の教えを受けて往生した人々の還相した姿であり、③さらには宿因によ
つて善知識に遇い、易行道を实践した衆生の得生以後の人格であると考
えられ、それらすべてが道綽の提示する善知識の全体像であると結論づ
けられる。

以上、『安樂集』における宿因論と善知識の還相的性格を通じて、道
綽自身が第一大門に「前に生ずる者は後を導き、後に去る者は前に助い
て、連続無窮にして願わくば休止せざらしめんと欲す」（浄全一・六七四
上）と述べているように、両者の関係から浄土教における往生の連続性
を認めることができ、また『安樂集』ではあまり説かれていない「還相」
という問題についての再解釈が可能となる。

（大学院仏教学研究科仏教学専攻博士後期課程）